

京の博物館

目次

| | | | |
|-------------------|---|-----------------------------|----|
| 巻頭言…………… | 1 | トピックス…………… | 6 |
| おこしやす | | 京のかるちゃーすぽっと「ひと・もの・わが館自慢」 …… | 8 |
| ・ 想い出博物館 …… | 2 | 美術館・博物館と私…………… | 11 |
| ・ 白沙村荘 橋本関雪記念館 …… | 4 | ティータイム…………… | 12 |



京博連と共に、京都のまちを 「まるごと博物館」に

巻頭言

京都市長 門川 大作



「お茶を点てていただいた時に、作法が判らない場合どうする？お茶をにごす。」ユーモアあふれるジョークだと思います。

悠久の歴史に培われた豊かな文化と奥深い伝統に彩られたまち京都では、ふとしたきっかけで本格的なお茶や生け花などに会う場面が多くあります。私も、お茶や生け花をはじめ、伝統的なしきたりを体験

できる博物館をお訪ねし、時間を忘れて楽しませていただいた経験がございます。

私はマニフェストに、市内全域の伝統文化や歴史、産業、自然科学など、様々な分野にわたる博物館・美術館を生かして、京都のまちを「まるごと博物館」にすることを掲げております。この実現に向けてのよきパートナーとなっていたいただくのが、161の博物館・美術館と21の関係団体により組織されている「京都市内博物館施設連絡協議会（京博連）」の皆様です。平成4年に設立されて以来、各館の活動はもとより、「博物

館連続公開講座」や「ミュージアムロード」の開催を通じて、本市の生涯学習の振興、文化の向上に多大の御尽力を賜って参りました。

昨年12月には京博連役員の皆様、加盟館の皆様100名以上が御出席され、「京博連設立15周年記念式典・祝賀会」が盛大に催されました。私も当時、教育長としてお招きいただき、樋口隆康会長をはじめ多くの方々と京博連の将来について語り合うことができました。

また、その折に京博連15周年を記念し、改訂版が披露された「京都市内博物館ガイドブック 京のかるちゃーすぽっと」は、京博連加盟館の多彩な魅力が凝縮された素晴らしい内容となっており、私も京都の魅力を世界に発信する場や様々な機会に活用させていただいております。

今後とも、現地・現場主義と「徹底したプラス思考」を信条に、一人ひとりが誇りを持って満足度の高い生活を送ることのできる未来の京都、個性と魅力に溢れる京都のまちづくりに全力を挙げて参りますので、京博連加盟館の皆様におかれましても、一層の御支援・御協力を賜りますようお願い致します。

祭キャラも京都からはじまった

世界一の玩具王国だった日本

思い出博物館



大正時代のキューピー塔

最近〇〇年祭という祭事に使用されるマスコット（祭事用キャラクター）が注目され、奈良や彦根の祭キャラが話題を集めています。この祭キャラが最初に登場したのは、なんと京都であったことは、ほとんど知られていません。

大正15年7月1日～8月20日「こども博覧会」が京都の岡崎公園で開催されました。そのシンボルとして京都駅前に大きなキューピーの塔が登場しました。高さは8m72cm。キューピーだけの高さが2m72cm。裸のキューピーが京都駅前で、お客様を迎えていました。これは、現在人気の祭キャラに先んずること約80年。京都の先見の明はさすがです。

さて、当館の玄関前には相撲取りのように大きなキューピーがお客様を迎えています。館内には、キューピーの特設コーナーを設け、アメリカ・ドイツ・日本、各国のキューピーが一堂に展示され、楽しく鑑賞いただけるようになっています。当館は又、キューピーの作者ローズオニールのファミリーであるローズオニール財団（アメリカ）と協力し、日本で正統なキューピーの啓蒙活動を展開しています。さらに世界で初めてキューピー人形を製造したドイツのオーアドルフ市と交流を進めています。この交流を契機として現在オーアドルフ市は、音楽家バッハの町からキューピーとバッハの町として新しい町のアイデンティティを築き始めています。



キューピーの生みの親のローズオニールのキューピー人形

江戸時代の玩具

子供達の玩具を見ればその国の文化度が判ると言われています。日本の玩具は、世界の最先端をいっていました。江戸の文化年間(1804年～)より「紙着せかえ」がみられるようになりました。ヨーロッパでのPAPER DOLLの幕開けが1800年以降といわれていますので、当時の日本の童女のファッションへの関心度は世界の最先端をいっていたといえるでしょう。江戸時代の木版カルタには、童が机に向かって書を練習している絵札と「手ならいでくろうしてじゃ」という読札があり、遊び道具を通して、昔も今も子供にとって勉強は大変であったことを伺い知ることができます。



世界に先駆けた江戸の紙着せかえ

明治時代の玩具

幕府の鎖国政策から一転、いきなり世界へと目を向け近代化へとばく進した明治。明治5年汽車が開通。明治28年には日本で最初の電車が京都に開通しました。子供の世界でも新素材のブリキ製の汽車・電車・自動車が登場。ここにも文明開化の波が押し寄せてきました。女の子の世界にもお化粧ごっこの道具にガラス製の化粧瓶が登場したり、紙着せかえには鮮やかな色のインキで印刷された洋装ファッションが登場して華やかな玩具の世界が広がりました。近代化の象徴である乗り物の玩具など明治の玩具は、現代の玩具の出発点であったといえるでしょう。



明治のブリキ製玩具 汽車(左) 自動車(中) 電車(右)

● 大正時代の玩具

大正時代日本の玩具産業は一段の進歩を遂げました。それまでは外国製のおもちゃに憧れをもっていました。当時世界一の玩具王国だったドイツが第一次大戦（1914）に入り、それに代わる玩具の生産国として日本が台頭、日本製の玩具が世界中に輸出されるようになりました。同時期に今までにない新しい感覚のキャラクターが登場しました。正ちゃんとリスの冒険談「正ちゃんの冒険」、のんびりした父さんの滑稽談「ノンキな父さん」。これらは、現代のアニメの人気キャラクターの出発点でした。



日本初のキャラクター
「正ちゃんの冒険」(左)「ノンキな父さん」(右)

● 昭和初期の玩具

この時代は通称戦前と呼ばれ、戦争の影のある暗いイメージで捉えられがちです。しかし玩具の世界では世界一の幸せな平和外交をしていた時代でもありました。日本製のセルロイド玩具が世界一の生産量となり大量の玩具が輸出され世界中の子供に喜びと幸せを運んでいました。アメリカにも輸出されましたが、そのアメリカからはミッキーマウスやベティ・ブープ等が日本に輸出され、現代と変わらぬ人気者となりました。世界の子供たちには玩具を通して平和なひとときがあったことに素晴らしさを感じます。



世界一の生産量を誇ったセルロイド玩具

● 戦中の玩具

昭和10年代になると玩具も統制令がしかれました。しかしそんな時代でも子供達はブリキから木製に代わった自動車や軍刀で、ガラスから土製に代わったおはじきで、無心に遊んでいました。また、終戦間際の風俗を伝える土人形も残っています。可愛い女学生が鉢巻・もんぺ姿で竹やりを持っている時代の証人です。また、こんな厳しい状況下でも人形を造った人形職人の人形に注ぐ愛情にも驚かされます。現実には、竹やり訓練の女学生の頭上にもアメリカ軍の爆弾がそして伝単(ピラ)が落とされたのでした。



竹やりを持った女学生と「伝単」ピラ

● 戦後～昭和30年代黄金時代の玩具

戦後玩具も木や紙の素朴な素材から復興を遂げていきました。昭和30年代になると飛躍的な発展を遂げ、世界一を誇る玩具王国となり世界中で日本製の玩具が愛されるようになりました。特にこの時代のブリキ製ロボットは現在では世界で最高との評価を受け、日本が玩具王国であったことを物語っています。

思い出博物館では、江戸から歴史をたどった玩具を展示し、かつて世界一の玩具王国だった姿を浮かび上がらせています。



ロボット化時代の先駆けブリキロボット

思い出博物館

館長 北川 和夫

所在地 〒616-8426

京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町6-5

TEL.075-862-0124

交通 最寄り駅JR嵯峨野線「嵯峨嵐山駅」下車
(思い出博物館へ 徒歩20分 タクシー5分)
阪急電鉄「嵐山駅」

京都市バス「嵯峨釈迦堂前」下車

開館時間 午前10時から午後5時

休館日 毎週火曜日(要電話確認)

人生百に^み盈たず、 幼^{よう}耆^きその半^{なかば}に^{きよ}居す

白沙村莊 橋本関雪記念館

人生百に盈たず、幼耆その半に居す 三十年の月日、私の生涯の大部分をここに費やしたわけだ。随って眼前の移り変わりのみならず、私の身边にもいろいろの変化があったが、離合反復なき人事の中に在って一木一石は私の唯一の伴侶であったともい言える。私にとっては、庭を造ることも、画を描くことも一如不二のものであった。はじめてここに土地を見出した時は、地面は道路より五、六尺も低く、一面の水田で、今の池の面が地面に当たり、つけものの、おもしろにする程の石すら見出すことの出来ない深田で、田螺や蛙が雨を呼んでいる有様で、尺樹拳石、みな他から運んでくることを余儀なくされた。土地も池のあるところ以外悉く土を盛ったものである。随って人の知らない努力が払われている。ここ白沙村莊を見る人に一番先に知ってほしいのは、そういった努力の払われていることと、第二はこの地域が一度に買われたものでなく六・七回に涉って、ひろげられた事で、巧者に見る人なれば、そういった形跡が残っているのが見られよう（中略）石も木も呼吸している。それを見た瞬間、その呼吸さえびったりすれば、すぐどこに据えるかという判断がつくべきである。これは私の信条である。一つの物象を見た刹那、これを描こう、そう感じた時、すでに画は出来ているのである。石を据え、木を植えるのも同じ理合いでならねばならぬ。

(白沙村人随筆遺稿より抜粋)



庭園中央芙蓉池

● 白沙村莊について



北門

洛北の入り口、眼前に大文字山を望む銀閣寺の参道を降りた哲学の道のすぐそばに、3,400坪の敷地をもつ庭園があります。この庭園は大正・昭和期の京都画壇で活躍した日本画家の橋本関雪(1883-1945)が大正5(1916)年に造営した邸宅内に造られたもので、設計を関雪自身が行い自らの美意識に基づき全てを行っただけで生涯最大の作品であるとも言えるものです。そして日本画家の美意識が強く反映された庭園として、現在国の名勝に指定されています。関雪はこの庭園に、近在の村落がそばを流れる白川から白砂を採ることを生業にしていたことからあたりの住民に白砂村と呼ばれていたのをもじり、白沙村莊と名前をつけました。

● 橋本 関雪について

橋本関雪という画家は神戸の生まれであり、父の代までは明石松平に仕えた学者の家系であり詩書画を能くする一族に育ち、20歳の頃に竹内栖鳳(1864-1942)



存古楼内観

の主催する画塾『竹杖会』に入門するために京都に移り住みました。その後岡崎から南禅寺に移り、大正2(1913)年に初入選を果たしたことを契機に画室を備え

えた住居を造営しそこに移る計画を立てます。そして探し買い求めた銀閣寺の土地に、己の美意識と文人趣味を存分に取り入れた彼自身の理想郷としての庭園が造営され、それは昭和20(1945)年に関雪が亡くなるまでの30年間絶え間なく続きました。同時に関雪は他にも明石、宝塚、大津などに同規模の庭園を造営しています。

● その後の白沙村荘

関雪の亡き後は、2代目の節哉が遺されたコレクションと庭園を断続的に特別公開しながら保存管理を行い、そして昭和56(1981)年には3代目の歸一が庭園の東部分にあたる正門、池、画室、茶室などの主要部分を財団法人化し、『白沙村荘 橋本関雪記念館』として一般公開を始めました。現在は4代目に移行し、保存管理が行われています。



問魚亭

● 白沙村荘のみどころ

庭園内には関雪が文展、帝展などへの出品作を制作していた52畳の大画室『存古楼』を中心として、茶の湯が好きであった妻の為につくった茶室『問魚亭』『倚翠亭』『憩寂庵』や、その妻の菩提を弔う為に建てた『地藏尊立像(伝運慶作 鎌倉時代・重要文化財)』を安置した持仏堂などの建物があります。そして園内の至る所には全国から関雪が蒐集した石塔や石仏などが無数に点在しています。これらの石造美術は当社社から多くの文化財が海外へと流出していたことを憂いた関雪が、資金提供と引き換えに譲り受けたものです。年代は平安から桃山と幅広く、種類も五輪塔(国東塔)や層塔、宝篋印塔、燈籠、石幢、石仏、磨崖仏、羅漢仏など実にバリエーションに富んでいます。

庭園の最後には彼の作品やコレクションなどを紹介



藪の羅漢石仏

している小さな展示室があります。こちらでは期間での展示入れ替えにより、関雪の作品やスケッチ、作品草稿、関雪が実際に使用し

ていた印類、そしてギリシャ陶器などの内外のコレクションを展示しています。

関雪が造り上げたこの市中の山居の楽しみ方は、ただ庭に佇み外部の喧噪を忘れてみるのが一番良いのかも知れませんが、春には関雪夫妻ゆかりの『関雪楼』が哲学の道を、秋には庭園の紅葉が鮮やかに池を彩ります。これらを楽しみとして訪れるのもまた悪くはありません。



芙蓉池秋景

白沙村荘 橋本関雪記念館
副館長 橋本 眞次

所在地 / 〒606-8406

京都市左京区浄土寺石橋町37

TEL (075) 751-0446

FAX (075) 751-0448

交通 / 市バス「銀閣寺前」,

「銀閣寺道」下車, 徒歩1分

開館時間 / 10時~17時

休館日 / 無休

料金 / 一般 800円, 学生 500円 *特別展は別途

ホームページ / <http://www.kansetsu.or.jp>

京都市博物館連続公開講座

第4回 1月25日(金) 小堀京仏具工房 京仏壇京仏具資料館

講演：「仏壇仏具について」

京仏具(株)小堀 専務取締役 小堀 進 氏

京仏壇・京仏具の製作にまつわる様々なお話をお聞かせいただいた後、工房の見学や金箔押し体験をさせていただきました。職人の方にも直接お話をうかがうことができ、「伝統の技」「本物の素晴らしさ」を体感することができました。



第5回 2月22日(金) 藤井育成会 有鄰館

講演：「中国美術の見どころ～私達の祖先文化に想いを馳せる～」

藤井育成会理事長・有鄰館館長 藤井 善三郎 氏

中国美術の見どころや中国文化について、大変わかりやすくご講演いただき、参加者の皆さんが熱心に聞き入っておられました。仏像、青銅器、古印、漆器、書画、寝台などの多種の貴重な収蔵品を鑑賞させていただき、中国を肌で感じるすることができました。



お知らせ

京都市生涯学習情報検索システム

「京(みやこ)まなびネット」

<http://manabi.city.kyoto.jp/> を開設。



京都市内を中心とした生涯学習情報を紹介するホームページです。博物館や美術館の展覧会の情報、家族で楽しめるイベント情報が満載です。是非とも、ご活用下さい。

京まなび

検索

*京博連加盟館の皆様には、引き続き、情報の登録をお願い致します。

報告 第13回ミュージアムロード 「知ったはる？もっと京都！」

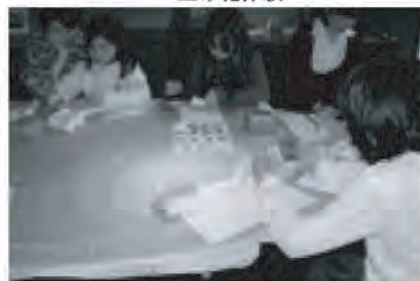
期 間： 平成20年2月9日（土）～3月16日（日）
 参加館 会場館 33館 体験協力館 1館
 参加者数 約15万人
 スタンプラリープレゼント企画応募者 116名

京博連加盟館の皆様のご協力でもっと盛大に開催することができました。参加者数も大幅に増加しました。

次回も、たくさんの市民、観光客の皆様が博物館、美術館に足を運んでいただけるよう、より一層内容を充実していきたいと考えています。



生け花体験



親子のアート教室

参加者アンケートから

知っているようで知らなかった京都のことを学びました。
 子どもも楽しめる体験をもっと増やして欲しい。
 期間中に全部の館を回れないので、期間を長くして欲しい。
 観光客でも分かりやすいものにして欲しい。

他都市施設視察研修

平成20年3月5日（水）、兵庫県にある明石市立天文科学館（明石市）と兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町）を総勢30名で訪問しました。

午前中は、明石市立天文科学館において日本の標準子午線上にあるという特色をいかした展示など、館内施設の見学をしました。

午後からは、兵庫県立考古博物館を訪問。館内展示を説明していただきながら見学した後、館の運営やボランティア育成についてお話を伺いました。最後に古代体験プログラムの「勾玉作り」に挑戦し、参加者一同、童心にかえって懸命に石を磨きました。

両館ともに大変温かく迎えていただき、博物館運営についての研修を深めるとともに、参加者の皆様方の交流の場としても和やかな雰囲気の中、充実した一日となりました。



明石市立天文科学館にて



館内見学（明石市立天文科学館）



館内見学（兵庫県立考古博物館）



勾玉作りに挑戦
（兵庫県立考古博物館）

永楽屋 細辻伊兵衛商店「町家手拭ギャラリー」

株式会社 エイラクヤ
取締役企画担当 岩子 圭介

わが館を紹介

「永楽屋細辻伊兵衛商店」という名の由来は戦国時代、織田信長から命を受け、先祖が出陣した際、直垂(ひたたれ)に永楽通宝の紋が入っていたことからその名をとって名付けたといわれております。江戸初期の元和元年(1615年)に創業して以来約390年、14代にわたって綿織物商を営んでおります。当店では、手ぬぐいが日本文化に定着し始めた明治から昭和初期にかけて数多くの作品を制作し、本店と祇園店の各2階にある「町家手拭ギャラリー」にて展示をしております。現代でも十分に通用する美的センスとユーモア、又、当時でしか表現できなかった細やかな時代背景や描写は今、新たに描く事の出来ない手ぬぐいであり、その当時をしのぶ貴重な資料でもあります。同時に当社の手ぬぐいの製造工程をパネルにて展示、紹介しております。



わが館ひと自慢

永楽屋十代目 細辻伊兵衛の取り組み

昭和初期、当時の最高技術を駆使して手ぬぐいを染める「百いろ会」に取り組んだのが、太物商永楽屋十代目伊兵衛。図案テーマは多岐にわたり、構図や色使いなど、斬新なアイデアにあふれた作品が人気を博しました。



わが館もの自慢

390年間におよぶ 約10,000点の手拭の数々



創業390年の当店には明治から昭和初期にかけて制作された手ぬぐいが数多く残っており、その柄は京の年中行事、歌舞伎、舞妓姿や季節の風物詩など多岐に渡り、世情にあわせてありとあらゆるものを題材に表現されております。懐かしさと斬新さに、戯画の中に描かれた素晴らしいデザインの手ぬぐい約10,000点の中から季節にあわせた柄を中心に額に飾り、代々の出来事を記した家内年表や調度品など、当時を偲ばせる古物などと共に展示しております。

- 所在地/〒604-8174 京都市中京区室町通三条上る役行者町368番地 TEL (075) 256-7881
- 交通/地下鉄「烏丸御池駅」下車 徒歩3分
- 開館時間/11時～19時 休館日/無休
- 料金/無料
- ホームページ/<http://www.eirakuya.jp>

京都花鳥館

京都花鳥館 田平 知子

わが館を紹介

京都花鳥館は、ドイツが誇る至宝「アンティーク・マイセン（古マイセン）」（王侯貴族のために創出された1700年代～1800年代の西洋磁器作品）の中でも、特に花と鳥をあしらったものを展示する「マイセン館（西館）」と、近代日本画の大家として著名な上村家三代目当主・淳之画伯の「花鳥画」を展示する「日本画館（東館）」によって構成されています。

ドイツと日本という東西の文化を「花鳥」というモチーフを通して結びつけた、特色ある展示館です。一見、異質とも思える2者は、優雅なたたずまい、繊細な表現など様々な面で互いに響き合います。

展示館そのものもシックな和風洋館で、マイセンと日本画が映えるように作られており、四季折々の風情を見せる中庭と共に、日常の喧騒を忘れ、美しい花と可愛らしい鳥に心をいやしていただければと思っております。



わが館ひと自慢

スタッフ一同が醸し出す館内の雰囲気

当館では、ゆっくりと館内を楽しんでいただき、また、作品の事をより詳しく知っていただけるよう、スタッフによる作品の説明をさせていただきます。

小規模な展示館ではありますが、内容はたっぷり。館内の雰囲気もシックな造りになっており、心ゆくまで作品達を堪能していただけます。



わが館もの自慢

スノーボール

当館のマイセン磁器のコレクションの中でも、一際珍しいものが「スノーボールシリーズ」と呼ばれる作品です。日本のオオテマリに似たスノーボールという花を一面にあしらったこの作品達は、マイセン窯の職人の技術の粋を集め、長い年月をかけて作り上げられたもので、中には高さ1mを超える作品もあり、世界でもなかなか目にする事のできない作品です。

飾り壺や水差しといった、華やかで愛らしいスノーボールのコレクションは、「マイセンにこんな作品があるなんて知らなかった！初めて見ました！」とご好評いただいております。



- 所在地 / 〒615-8296 京都市西京区松室山添町26-24 TEL (075)382-1301
- 交通 / 阪急嵐山線「松尾駅」下車 徒歩8分、京都バス「北河原町」下車 徒歩3分
- 開館時間 / 10時～17時 休館日 / 月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、展示替期間
- 料金 / 一般1,500円、中・高・大学生1,200円
- ホームページ / <http://www.kachokan.jp>

小堀京仏具工房 京仏壇京仏具資料館

わが館を紹介

株式会社 小堀
専務取締役 小堀 進

京仏具株式会社小堀では、安永4年(1775年)より培った技と心を含め、仏壇・仏具づくり一筋に歩んでまいりました。1996年(平成8年)5月、「京仏具の伝統」を守り続けたい。「品質の違い」を実感していただきたい。本物の京仏具を少しでも「お値打ち」にお求めいただきたい。伝統を守りながら「新たなるものの開発」にも挑戦していきたい。このような願いを実現するため私ども小堀は「小堀京仏具工房」をつくりました。同時に工房内に「京仏壇京仏具資料館」を開設、京仏壇・京仏具の製作にまつわる様々な資料の公開を通し、お客様に「伝統の技」「本物の素晴らしさ」をご理解いただけることを願っております。



わが館ひと自慢

小堀京仏具工房の木匠 後田 文武 氏

京仏壇京仏具資料館には寺院で用いられる本尊を安置する宮殿(くうでん)という厨子の部材見本が展示されています。伝統技術を駆使し、1本の木から実際にその製品を生み出すのが木地専門職人である後田文武氏。宮殿には百点以上のパーツがあり、永い歴史に育まれた京仏具の伝統を継承した細部意匠が結集されます。全体バランスや細部の寸法割付は図面ではなく、「杖(つえ)」と呼ばれる角棒に実寸を目盛ることから始まります。柱の太さや屋根を支える垂木(たるき)の巾や間隔など、伝統の「木割(きわり)」という技法によって宗派に根ざした様式を守ります。棟の緩やかな曲線や躍動感あふれる破風のラインが、鑿(のみ)と鉋(かんな)でシャープに削りだされます。釘を使わずに木と木がかみ合う「ほぞ組み」でパーツが組み立てられたとき、自然と手が合わさり、多くの人々にやすらぎを与えてくれます。



わが館もの自慢

小堀では、皆さまにより深く京仏具の伝統をご理解いただくために「京仏具資料館」をつくりました。資料館では、伝統の京仏具の製作工程にかかわる多くの資料が展示されています。仏具製作に使用する道具や品質の違いが一目でわかる部材見本、京仏具の名品・逸品の数々をぜひご覧ください。

(1)京仏具の名品、逸品の展示

伝統に育まれてきた本物の京仏具。その中でもよりすぐられた逸品の数々をご覧ください。

(2)本物の京仏壇を知る比較展示

同じ大きさでも材質や技法の違うお仏壇を比較展示。その品質と価格の差を見比べてください。

(3)伝統的京仏具の製作工程の展示

京仏具の製作工程を材質見本や道具、製品サンプルなどの展示とパネルにより、詳しく解説しています。「新たなるものの開発」の展示「京仏具の伝統」を守り続ける一方で、新しい技術の導入や新素材の研究・開発に挑戦している、その成果をご覧ください。



- 所在地/〒607-8310 京都市山科区西野山百々町88番地 お問い合わせは㈱小堀本店TEL (075) 341-4121まで
- 交通/京阪バス「花山稻荷」下車 徒歩10分
- 開館時間/平日の火～金のみ見学可能(10時・13時・15時) 1週間前に要予約
- 休館日/日・祝日、お盆期間、年末年始 料金/無料 ●ホームページ/http://www.kobori.co.jp

月桂冠大倉記念館試飲コーナーでの会話から

大倉記念館の試飲コーナーには、いろいろなお客様がお見えになりますが、中でも年配のお客様に、「先ず最初に昭和40年代の味を再現して作ったお酒を賞味していただきます」と申し上げますと、途端に30年以上の昔にタイムスリップした話題になって当時は懐かしむ方も多く、思わず話に弾みがついてしまうこともあります。また、毎日異なるお客様にお会いできるのも楽しみです、いろんな年代の方と話を交わして、お互いに教え又、教わることも多くあります。

平成4年に清酒の等級制度が無くなりましてから今年で16年になりますが、現在20歳を過ぎてお酒を嗜むようになった若い人たちは、「一級酒」、「二級酒」という呼び名さえ知らない世代の人たちが増えていることも驚きです。

長い年月の間に、お酒との付き合い方もずいぶん変わりました。「夏は扇風機の風を受けて冷たいビールのグラスを傾け、冬は炬燵で熱燗をお調子で」というのがいつのまにか、年中冷暖房完備の部屋で「高級冷酒」をグビグビという時代になりました。お酒の歴史もこれからまだまだ変化していくことですが、一度、「月桂冠 大倉記念館」にお越しいただき、お酒の歴史を再発見いただければと考えています。

京都市博物館ボランティア「虹の会」
今井 昭三



世界遺産仁和寺

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」
河村 千恵子



遅咲き桜も散り始めた晩春の一日、御室の仁和寺を訪ねた。JR花園駅から北を望むと、右手に妙心寺の伽藍、左奥に大内山の山裾に仁和寺、その前に徒然草の双ヶ丘、駅前には五位山を背に法金剛院がある。この辺り一帯は平安時代より風光明媚で皇族や貴族が好んで山荘や庵を営んでいた場所と云う。この境界は私のお気に入り寺裏山の成就山の八十八カ所廻りもあり度々足を運んでいる。仁和寺は幕末までは御室御所とも云われ永い間門跡寺院であったため、王朝の「雅」や「風格」を色濃く残す。霊宝館には数々の宝物が収蔵されていて春秋2回一般公開され「空海の三十帖冊子」、日本最古の医書「医心方」、現存最古の地図「日本図」等意外に思える物も含まれている。その中で創建当時の御本尊「阿弥陀三尊像」の定印を結ぶ姿も現在知られている最古の例と云われている。当時は近寄ることも出来なかった仏像に対峙し、時空を越えた人々が体験したであろう心の浄化と安堵を共有出来て感動を覚えた。仁和寺は近年「古都京都の文化財」として世界遺産に登録され世界各国から訪れる人が多くなり喜ばしい限りである。

本ものの迫力に迫る暁斎展

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」
上村 憲子

年明けに、成田山書道美術展で河鍋暁斎展が開催されました。遠いのでさすがの私もあきらめていました。なんとその図録は京都の思文閣出版から出されるとの記事を見つけ、手に入れることが出来ました。見返り表紙を飾る新富座の幅17メートル、高さ4メートルの大画面をたった4時間で仕上げた暁斎の作品は、想像がつかますか？今回、実物のおどろおどろした空気が「京都国立博物館」で体感できました。浮世絵から狩野派の技法も習得した彼だからこそ即興で色々なパターンの作品を描けたかと思います。

美術鑑賞の楽しみの一つに、作品と会話するつもりで、好きな物を選んだり、夢想の世界を作ることがあります。ただし、メディアが取り上げるとドツと人が押し寄せ、人に飲まれ、疲れるイメージが先立つのはとても悲しい現実問題になります。入場者数が多いというのみで評価が高くなるのではなく、私は、ボランティアとして、誰もが発見を喜び、楽しい館づくりのサポートが出来たらうれしいです。





平安時代の住まいと衣服

風俗博物館 事務局長 寺石 勲

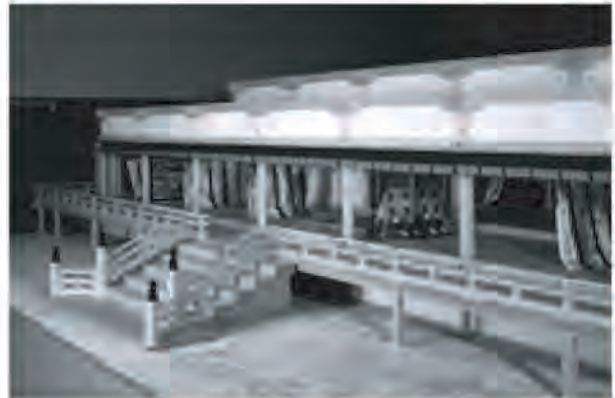
平安時代貴族の住居として使われていた建物は「寝殿造り」という様式のもので、中心の部屋を「母屋」と呼び、その周囲に東西南北それぞれ庇がついて、部分的に壁や襖で仕切り、他は屏風や几帳を立てることで一つの部屋としていたようです。床は全て板張りで必要に応じて畳や薄縁を敷いていたものです。屋内外の仕切りは「一枚格子」または「二枚格子」と云う雨戸がついています。

風通しが良く夏向きにと思えるような建物であるため四季を通じての生活は衣服で調整していたのでしょうか。

衣服は寒暑を防ぐだけのものではなく威儀を整えると同時に華美を求めるようになって、従来の大陸の文化を中心とした文化や習慣から日本独自の和様文化が育ち始めたもので、礼服や朝服に見られるように「凋装束」（薄い絹織物で縫製して曲線的な美しさを求めていたもの）から次第に現存する東帯や女房装束（十二単）のような「剛装束」（厚手の絹織物に糊や漆を張った布で縫製して直線的な美しさを求めたもの）というものに変化したものです。

「凋装束」ではご自身で着ることが出来ますが「剛装束」となるとご自身で着装することが困難であり必然的に他人の手をかりることになってまいります。そこで縫製や着装方法が考案されて、それを「衣紋道」と名付けられました。

「衣紋道」の創始者は後三条天皇の皇族にあたる「源朝臣有仁公」（1103～1147）とされています。「有仁公」は朝礼儀礼に過大な影響を与えた人物であったようです。「有仁公」没後「衣紋道」は藤原家の流れである徳大寺、大炊御門の両家に伝えられ、さらに徳大寺家から山科家、大炊御門家からは高倉家に伝えられたが明治4年に中断するものの明治16年に改めて継承することとなり、着装方法には山科、高倉両流派が存続しています。



風俗博物館「六條院 春の御殿」

現在の東帯や十二単の装着方法は、その「衣紋道」を根拠としてそれぞれの所で現在も使われています。

また、男性の正装である東帯などの色目は紫色の濃淡で官位により分けていましたが、後には黒、緋、縹の各色目が決められました。女性の場合は定めが少なく、好みにより考案されていたので数多くの色目が存在します。

「色」の表現には、「染色」（白絹織物を染めるもの）、「織色」（先に染めておいた色の異なる「経」と「緯」で布を織り上げるもの）や「かさねの色目」などがあります。

「かさねの色目」には、「布」、「衣」の二種類あり、「布」によるかさね（重ねの色）では、表の布と裏の布を合わせることで裏の色が影響して微妙に色彩が変化することの楽しみがあります。

「衣」のかさね（襲ねの色）では何枚もの衣を着ることで襟元や袖口に見られる色彩を楽しんでいたもので女房装束（十二単）などに使われていたものです。

このように四季により草木が変化することを捉えて色彩を考え装束の色目として表現するという細やかなところなど日本の誇れるところではないでしょうか。

発行 平成 20年 5月

編集・発行者 京都市内博物館施設連絡協議会事務局（京都市教育委員会生涯学習部内）

所在地 〒604-8571 京都市中京区富小路六角下 元生祥小学校内 TEL075-251-0410 FAX075-213-4650

ホームページ http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/soshiki/29-17-1-0-0_5.html

「京博連だより」に対するご意見・ご感想をお待ちしています。